

平成二年三月二十五日（日） 郷土研究会資料

第一七三回 史跡めぐり案内

# 日光御成道を訪ねて

日光道中との合流地・幸手宿

越谷市郷土研究会

第一七二回 史跡めぐり

とき 平成二年三月二十五日(日)

集合 越谷駅東口前 午前八時三〇分

行先 日光御成道終点・幸手宿

コース 越谷駅―幸手駅・東武日光線開通記念碑―一色(陣屋)稲荷―天神神社―満福寺―幸宮神社―田宮雷電社―宝持寺―聖福寺(將軍御膳所)―正福寺の義賑窮娥の碑―市勤労福祉会館で昼食―明治天皇行在所の碑―神明社(たにし不動)―神宮寺薬師―琵琶溜井―幸手駅―越谷駅 解散

会費 一、五〇〇円

案内者 理事 鈴木 秀俊

【幸手市】

県の北東端に位置する市（人口約五四、二〇〇人。面積三五・八二平方キロメートル。昭和六一年一月一日市制施行）。東は千葉県、南は杉戸町、西は久喜市、鷲宮町、北は栗橋町と茨城県に各々接している。昭和二九年一一月、旧幸手町と行幸村、上高野村、吉田村、権現堂村が合併して成立し、その後数回隣接町村と境界変更を行って今日に及んでいる。市域西部には古利根川、東部には中川（庄内古川）と江戸川が流れ、その流域にひらける沖積低地が市の大部分を占め、地勢は概ね平坦である。

産業面では農業が中心で、主として米・野菜作りが行われるが、近年宅地化がすすみ、東京方面への通勤者が増えている。

中世の幸手

源頼朝は鎌倉に幕府を開き、全国に守護地頭を置いたが、当時幸手地域は下総国下河辺荘に属し、頼朝の家人下河辺行平の所領であったとみられる。

のちに、幸手地域は桜井郷田宮荘と呼ばれていたが、鷲宮郷に属していた事もあったと言われている。田宮荘は近世の幸手領にあたる地域であるが、この地域は幸手の城主、一色氏の所領であった。一色氏は足利氏の庶子家（三河国權豆郡吉良庄一色に住し在名を以て、一色を称す）であるが、元應元年（一三一九）に一色公深が下総国田宮の本郷幸手に入部した。その後一色氏は九州探題に任ぜられ、太宰府にあったが、應永六年（一三九九）再び幸手に戻ったと伝える。

当時一色氏の本城は、利根川（古利根川）の要衝幸手牛村の城山に築かれ、幸手城とも称された。一色氏の城砦は、このほか、藤原長福の築城と伝える高野浅間台砦、天神島砦、浪寄田宮砦などがあった。

その後一色氏は、鎌倉公方・足利持氏の被官となる。この関係は足利成氏が古河に走り、古河公方と称してからも一貫して続き、関東管領・上杉方と戦を続けた。

天文二三年（一五五四）、小田原北条氏の古河公方攻略戦にあたり、一色氏の居城幸手城をはじめ、天神島砦、高野浅間台砦などは北条方に攻められ落城、領主一色頼直をはじめ多くの戦死者を出した。一色一族はこの合戦によって浪人となり、この地一帯に帰農した者も相当いたようである。

幸手宿右馬之助町の開発者・中村右馬之助氏、中島村の芦場氏など、近世村落の多くの名主層がこのような伝承をもっている。

#### 近世の幸手

天正一八年（一五九〇）七月、豊臣秀吉の小田原城攻略により、関東の覇者小田原北条家が没落し、替わって徳川家康が関東に移封され入国した。

幸手の旧領主一色義直は家康により、新たに旗本にとりたてられ、本領のうち高五・一六〇石を与えられたが、間もなく知行所は下総国相馬郡内に移されている。しかし慶長三年（一五九八）一〇月、一色次郎照忠は、平須賀村・宝聖寺に寺領三貫文を寄進しているのので、一時は幸手領内に知行所を持っていたのではないかと思われる。いずれにしても当時幸手領は、ほとんどが幕府領であった。のちに幸手領の一部は、関宿藩領や旗本知行地に分給されたが、元禄年間には大部分が旗本知行地となっている。

幕府が倒れ、明治政府となった明治元年（一八六七）には下総知事県に属し、翌年に葛飾県となり、明治四年（一八七一）埼玉県に所属する。

#### 【幸手宿と日光道中】

徳川幕府による伝馬制度の実施で、幸手は奥州街道（のちの日光道中）の第六次の宿場に位置づけられ、おいおい宿

場機構の充実が図られて行った。

宿の構成は、街道に面して久喜町、仲町、荒宿、牛村によって成り立っていたが、伝馬需要の増大に伴い、元禄十二年（一六九九）上高野村の右馬之助町が幸手宿の中に組み入れられた。このうち久喜町は、久喜村（久喜市）の知久帯刀が開発した地で、出身地の久喜を称した。右馬之助町は、この地の開発者・新井（中村と改名）右馬之助の名を取ったと言われている。

明暦三年（一六五七）継立人馬二五人、二五匹を課せられたが、元禄九年には一万坪の地子免（宅地税）を許されている。

化政期（一八〇四、一八二九）には幸手宿の家数八一五軒、街道に沿って軒を連ね、二・七の日には六斎市が開かれて、近郷商圈の中心地として繁昌した。

ことに幸手は、川口、岩槻に通じる日光御成道（元の鎌倉街道）が、日光道中と合流する地点であり、將軍日光社参の時、幸手の聖福寺が將軍の御休所にあてられていた。

#### 【一色（陣屋）稲荷と一色氏館跡】

幸手駅付近一带に、城山又は陣屋という地名が残っているが、中世、古河公方足利氏の家臣、一色氏が館を構えた跡と言われている。今は昔を偲ぶ土塁跡などは無いが、ただ館跡と思われる位置から巽（南東）の方向に祀られている稲荷は、一色氏の守り神であると伝えられている。

今でも地元の人々の信仰を集めている。

#### 【天神神社】

御祭神は菅原道実公、応永年間（一三九四〜一四一一）当所の領主一色宮内大輔が、鎌倉荏柄天神社より分祀し創建されたと伝えられ、学問の神として崇敬されている。

裏町（当社）、天神島、平須賀、神扇、上高野の社をあわせて一色五天神という。

#### 【満福寺】

新義真言宗の寺で、内国府間・正福寺末荏柄山と号す、本尊は如意輪観音祀る。開山は秀栄上人元和二年（一六一六）七月二五日寂。一色氏の開基といわれ、もとは一色五天神の別当寺であったと考えられる。今は安産子育ての観音として、信仰を集めている。

#### 【幸宮神社】

昔は八幡香取社と呼ばれていたが、明治四二年に神社の合祀が行われたのを機会に、幸手の総鎮守となり幸宮神社と改めたという。本殿には見事な彫刻が施され、拜殿に江戸時代の絵師宗文が画いた、絵馬一対が奉納されている。境内には大杉、八坂、稻荷の諸社が鎮座する。

#### 【田宮雷電社】

昔この地方を田宮の庄といい、また幸手町を田宮町といった。その發祥がこの神社で、日本武尊の伝説にもでている幸手地方の最も古い神社である。今もこの付近一帯を田宮という。『新篇武蔵風土記稿』に「垂仁天皇十

年に一日天地震動雷鳴し、彼の像（御神体）田中に下れり、依てその所に社を建て土人田宮と呼びしより後、この辺の庄名になれりと」。水との関係深く農民の信仰が篤い。

### 【宝持寺】

小字浪寄にあり、禪宗曹洞派近江国石雲院末、金龍山と号し、本尊は釈迦如来を祀る。開山は季雲禪師、大永六年（一五二六）二月十五日寂す。開基は一色宮内卿公保、寛正五年（一四六四）二月十七日卒し、法諡を宝持寺殿孝嚴相公庵主と号した。慶安元年寺領十石賜る。

寺伝に、「第二世大安養康は、一色治部大輔頼氏の三男で童名を力丸といい、才能力量抜群であった。寛正二年十月古河公方成氏と上杉房顯合戦の時、成氏に属し敵七人を討ち取る。その中に童顔美麗なるものあり、ある人いうに、是某氏の愛子にて父母に孝あり、今年僅か十四歳なりと。力丸聞いて深く憐れみ発心し、吉祥寺良安阿闍梨の門に入り薙髮し、名を大安養康と改める。後遠州に赴き季雲に隨身し法を学ぶ。明応七年宮内卿公保の子石堂司郎義房、父の菩提の為一寺を建て、養康を住さしめ、則ち公保の法諡を取りて宝持寺と号し、七堂伽藍の道場とした。それより養孝一色の家臣金子淡路守勝則を供にし遠州に至り、師季雲を請し開山とし、その身は第二世を嗣ぎ、天文十八年四月二五日、百二歳にて寂せり」。

当寺には有名な千体地藏をはじめ、池の大雅筆長崎屋の看板など寺宝が多く、欄間の彫刻は素晴らしい。

### 【聖福寺（新寺）】

浄土宗京都恩院末、菩提山と号す。本尊阿彌陀如来、開山大蓮社乗替岩伝、大永三年（一五二三）正月二五

日寂す、寺領十石の御朱印は慶安元年に賜る。江戸時代、將軍や勅師が日光社參の時、お休みになった御殿所。將軍の間・勅使の間や門があり、左甚五郎作といわれる彫刻や絵画が素晴らしく、阿彌陀如来座像と観音像は運慶作といわれている。古い寺であるが、本堂を再建してから通称新寺と呼んでいる。

【正福寺の義賑窮餓の碑】

正福寺境内に碑がある。天明三年（一七八）<sup>三</sup>浅間山の大噴火により、この地方は大飢饉となった。この時、幸手宿の名主ほか二名の義人が金や食糧を出し合い、七〇日間も困る人々にカユを施した。関東郡代伊奈忠尊がこの善行を表彰したという記念碑である。小松石で作られ、高さ一・七メートル、幅〇・八八メートルの史跡に指定されている。

また同境内には、今は枯れてしまった大槇の碑や、権現堂河岸の道しるべ石などがある。

なお正福寺は、香水山と号する真言宗智山派の寺で、永正八年（一五一一）秀宥上人の創建と伝えている。本尊には、弘法大師の作という不動明王を祀っている。

【明治天皇行在所の碑】

明治九年奥羽御巡幸、同十四年北海道御巡幸、同二九年関東大演習と三回お泊りになられた中村家の跡にある。東郷元帥の書である。

【神明社】

同じ境内に菅谷不動と成田不動が祀られている。菅谷不動は眼病の仏として信仰篤く、成田不動は豪商上庄が



祀ったもの、神明社は中村家先祖が香取神宮と鷲宮神社を分祀したものである。社前に大正大震災により再建した拝殿の記念碑があり、震災によるこの地方の被害状況を知ることができる。

#### 【神宮寺薬師】

創立年代不詳。源頼朝奥州征伐のおり、祈願したという伝説が残され、鷹尾山誓願院といい本尊薬師如来は病気をなおす仏として信仰されている。上高野村はもと神宮寺村といい、この寺の寺領であったとも言われている。

#### 【琵琶溜井】

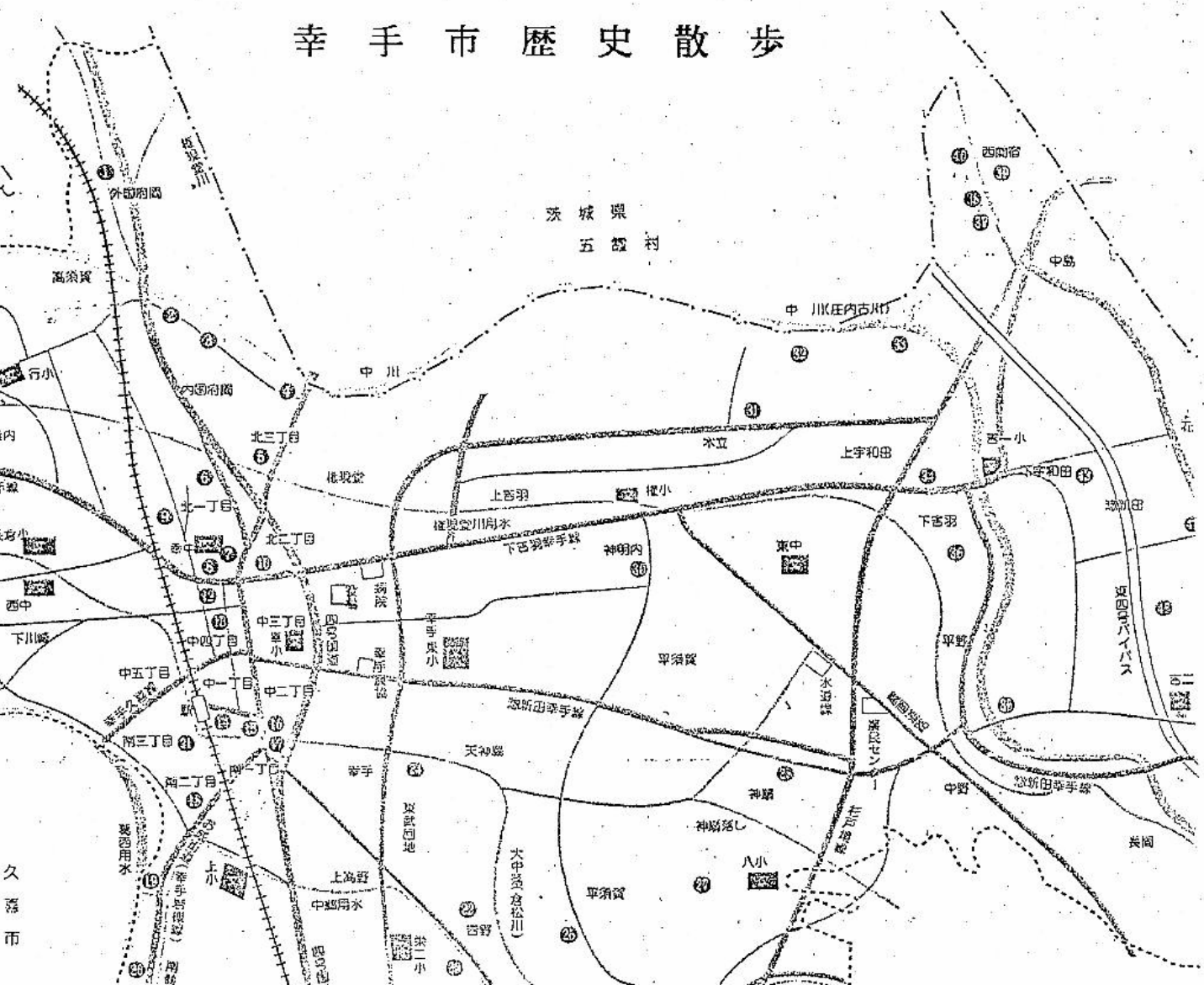
万<sup>治</sup>滋三年（一六六〇）関東郡代伊奈半左衛門忠克が、利根川筋本川俣村に坎樋を敷設し、幸手領用水路を開発したときに設けられた葛飾郡上高野村（現幸手市）の古利根川筋の溜井。その形が琵琶に似ていることから名付けられたといわれる。当時この溜井から幸手領北側用水、中郷用水、南側用水が引かれ、その余水は下流中島用水に流された。享保四年（一七一九）中島用水の廃止に伴って琵琶溜井が拡張され、中島用水に替わって当溜井から下流村々の用水に供給されたので、幸手領のみでなく下流九か領村々の重要な溜井となった。

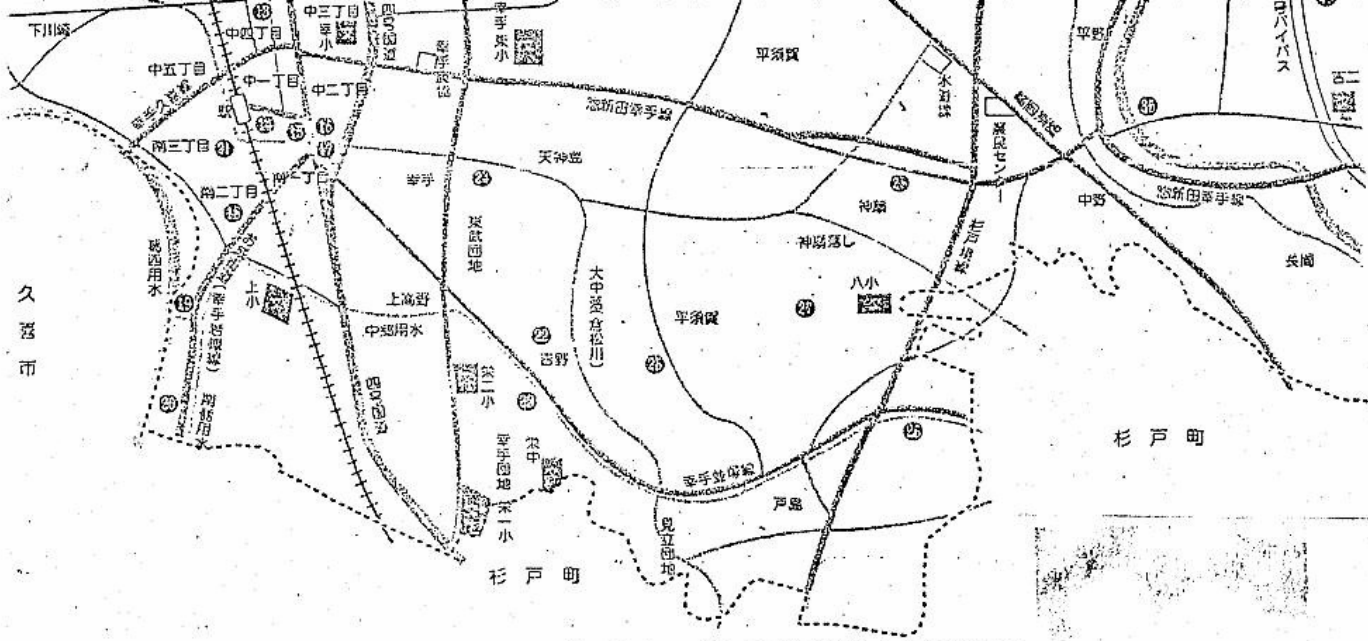
この用水路を葛西用水という。

#### 【東武鉄道日光線開通記念碑】

昭和四年四月の日光線開通を記念し、昭和七年四月に建てられた。根津嘉一郎書

# 幸手市歴史散歩





No.	名称	No.	名称	No.	名称	No.	名称
*1	外国領館の遺構	*13	聖宮神社	*25	宝鏡寺	37	西國宿浅間
*2	行幸堤の礎と権現堂堤の礎	14	幸手城跡	26	中原庵の蔵書様	*38	西川庵の墓
*3	願札の礎	15	明治天皇行在所	*27	横山光澄の墓	*39	閑宿間所跡
*4	権現堂河岸あととその付近	16	なにし不動様	28	神原土地改良記念碑	40	蓮花院の礎
5	藤野権現社	17	幸手宿町並	29	長閑の松の本跡	41	十の権現社
6	松守邸城遺跡跡	18	神宮寺の薬師様	*30	平将門の首塚	42	蓮花院の松
*7	正徳寺の義経朝服の礎	*19	琵琶湯井	31	木立の八幡様	43	菅島前荷の
8	聖徳寺新寺	*20	お成り街道・日光街道・鎌倉街道	32	権現堂川原修記念碑	44	太日川渡路
*9	宝持寺(浪寄)	21	津安寺	33	宇和田公園	45	中島用水記
*10	浪高津	22	吉野神社と姥神様	34	普賢神社と道標		
11	川崎の香取神社	23	三光院と道標	35	高須神社と観音院		
*12	田宮の菅菰様	24	天神島の天神様	36	地蔵院の地蔵様		

参考

【権現堂の桜】

大字権現堂にあり、幸手駅から約二キロメートル、徒歩約三〇分で権現堂堤に達する。幕末から明治の初期にかけて江戸川とともに賑わっていた権現堂川のなごり（昭和二年河川改修で廃川となる）として現在でも約六キロメートルの堤防が残っている。ここには約六〇〇本の染井吉野桜があり、毎年四月には桜祭りが開かれ、多数の人出で賑わっている。

明治九年、明治天皇が東北御巡幸のときに権現堂堤の築堤工事を御覧になったことを記念した碑が建っている。碑題は岩倉具視の直筆、地元ではこの巡幸を記念して、この堤を御幸堤（みゆきづつみ）とも呼んでいる。また、この堤上には西側から明治天皇行幸の碑・巡礼供養塔・権現堂川用水記念碑・巡礼の碑が建っている。巡礼の碑は、今から一九〇年ぐらい前、長い雨でこの堤が破れ、何度修理しても復旧しなかつたので、通りかかった母娘の巡礼が人柱となって、難工事を完成したとの伝説によって建てられた。また、供養塔はこの母娘の巡礼を供養するため、昭和八年（一九三三）当時の文部大臣鳩山一郎の筆によって建立されたものである。

参考文献

幸手市の歴史散歩

幸手市教育委員会

新編武蔵風土記稿

内務省地理局

埼玉県市町村誌

埼玉県教育委員会

埼玉大百科事典

埼玉新聞社

編集 鈴木 秀俊